

『地球崩壊の日（第1部 迫りくる水の壁）』再刊に際して（抜粋）

生野以久男

自分の著作について語ることは、好みではない。著作は著作に語らせるほかないと思っている。どんな内容のものであれ、一度公になれば、いかなる著作も、それなりに一人歩きするものである。

これに反して、このたび、『地球崩壊の日（第一部 迫りくる水の壁）』について語る気になったのは、上梓してから二〇数年を経ていることと、二〇数年来かぶっていた覆面を脱ぐ気になったからである。

『地球崩壊の日（第1部 迫りくる水の壁）』を書いていたとき、民間の研究機関に籍を置き、環境問題の研究に携わっていたが、環境問題の現実を目のあたりにして、人類の未来を思わざるをえなかった。

環境問題は人間が自ら招いたものである。有限な地球で、節度を忘れ、限りない欲望に身をまかせ、自然征服に血道を上げた結果である。

地球は有限である。有限な世界で、限りなく巨大化・高度化・大量化をめざせばどうなるか。プラスが巨大化・高度化・大量化すれば、マイナスも巨大化・高度化・大量化する。これに科学技術の跛行的展開がさらに拍車をかける。だがこれで終わらない。巨大なプラスも、やがて、有限の壁に阻まれ、巨大なマイナスへと転化することになるのだ。

今日の地球環境問題の噴出は、このようなメカニズムによるものである。

（中略）

『地球崩壊の日（第1部 迫りくる水の壁）』では、地球温暖化の果てに、火山灰による地球温暖化対策を講じようとして失敗する人間の悲劇を書いた。高慢にも、自然をコントロールできると考えていたのだ。

天空に広がった火山灰の傘は、地球温暖化対策を超えて地球に寒冷化をもたらし、食糧難の世界を現出させる。社会不安から国際紛争を引き起こすなか、突如として世界の火山が連鎖噴火を起こす。地球温暖化で弛んでいた南極の巨大棚氷が突如海中へ、そして大津波が……。

人間が自然事象をコントロールしようとしても、コントロールすることはできない。自然（地球）を完全に支配するには、自然についての完全な理解と完全なデータが必要だ。だが不完全な人間にはそれができない。人間には土台、自然のコントロールは不可能なのだ。

2011年3月11日、巨大地震が日本列島を襲った。東日本大震災だ。

日本列島が大揺れに揺れた。大津波が襲った。沿岸部は壊滅的な被害をこうむり、沿岸に集中立地していた原子力発電所が大事故を起こし、放射性物質を大量にまき散らしている。

地球温暖化はすでにかなり進行しているが、地球温暖化は地表の気温を上昇するだけではない。大気システムを攪乱させ、海洋システムを攪乱し、地殻システムを攪乱させて、ついに地球全体システムを攪乱する。攪乱された地球システムは予期しない動きをはじめ。

人間はすでに、現代文明の巨大化・高度化・大量化を通して、地球システムを攪乱し出している。日本列島はどうか。中緯度に位置する日本列島はこのほか、地球システム攪乱の影響を大きく受けるのだ。

日本列島はいまや焦熱地獄と化し、滝のような大雨が降り、狂風吹き荒(すさ)び、巨大台風が襲う列島に変わりつつある。巨大地震や地殻変動も頻発するにちがいない。やがて海面急上昇によって首都圏や臨海大都市は海中へ没し、沿岸工業地帯、臨海発電所や石油精製所などのエネルギー基地も海中に取り残され、日本列島は一段と痩せ細っていくことだろう。

東日本大震災がその前触れでなければよいが、とにかく、東日本大震災で発生した原発事故は、まさに、現代文明の巨大化・高度化・大量化はプラスばかりでなくマイナスの巨大化・高度化・大量化でもあることを実証した出来事となった。その後のもろもろの経過をみるにつけ、現代文明における科学技術の跛行的発展が災害などのマイナスをさらに拡大再生産しているように思えてならない。

せめて、これらが貴重な教訓となって、これまでの生き方が根本から問い直され、新しいシステムの日本が建設されることを乞い願い、その実現を心から祈るものである。

生野以久男(いくの いくお)プロフィール



本名、天野博正。1933年生まれ。山形大学文理学部卒業。財団法人・電力中央研究所勤務。環境総合推進室長。退職後は、文筆活動に専念する。『環境科学——人間環境のために』(技報堂出版)『新しい公害の科学』(春秋社)など、著書、論文多数。近く『地球崩壊の日』につづく「連作シリーズ・地球温暖化の果てに」を刊行予定。